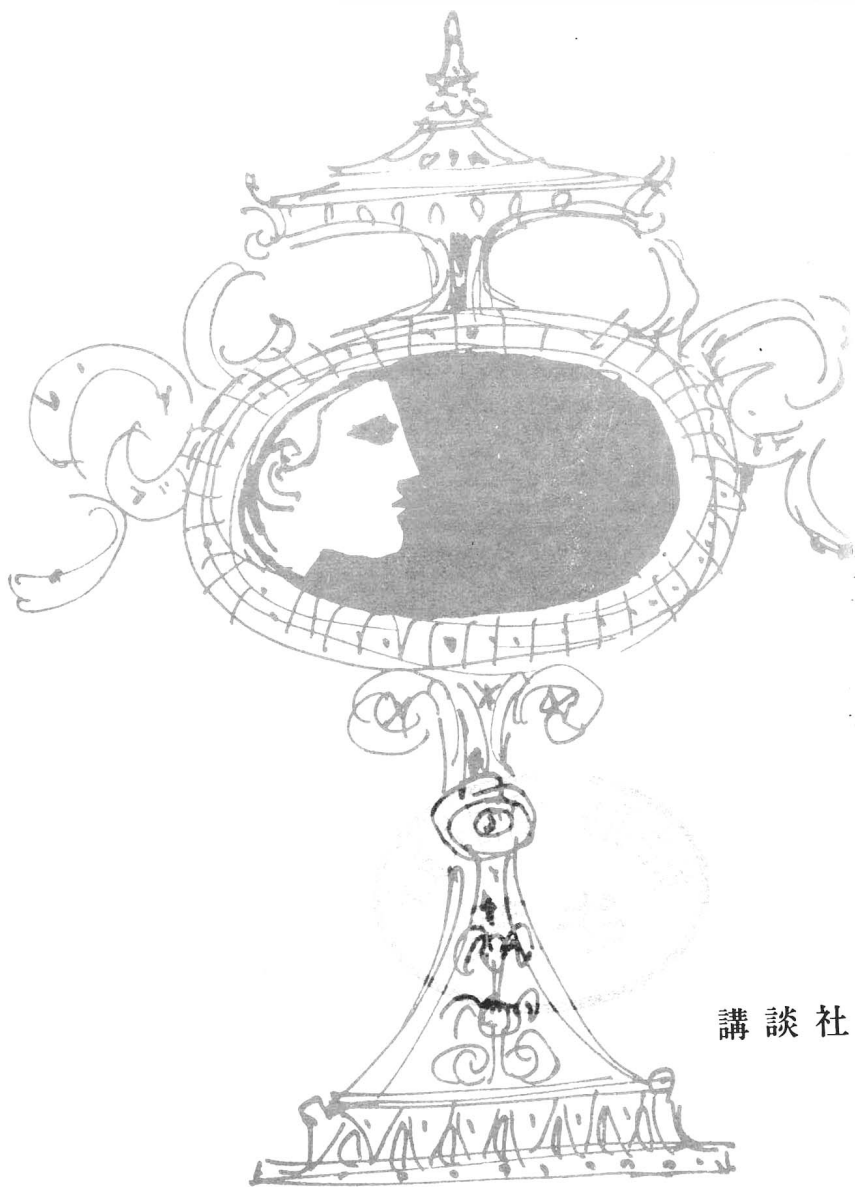


愛 慾

舟橋聖一



講談社

愛 慾

昭和42年 4 月28日 第 1 刷発行

著 者 舟橋聖一

発行者 野間省一

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽 2-12-21

電話 東京 (942) 1 1 1 1 (大代表)

振替 東京 3 9 3 0

印刷所 豊国印刷株式会社

製本所 有限会社文信社

定 価 550円

© Seiichi Funahashi 1967

Printed in Japan

落丁本・乱丁本はおとりかえ致します。

愛
慾

装
幀
荻
太
郎

含羞

1

——東京は第十八回オリンピックを翌年に控えて、ふくれ上り、至るところで犇めき合っていた。

田橋哲夫も、一生の幸不幸を、オリンピックに賭けている男の一人だった。彼はブダベストからチューリッヒで乗換えて、そこから一気に飛び、今、羽田空港に降りたところだ。

誰も出迎える者はいない。そんな大袈裟な身振りは大きらいだ。アメリカだろうが、ソヴェートだろうが、單身、ボートフォリオ一つかかえた国内旅行と変りない身軽さである。向うへ着いても、三流クラスの安宿に泊って、ついぞ街見物一つしたことはない。

田橋はS総合大学の体操科の一講師である。昔は自分もやった。鞍馬で選手権を争ったこともある。然し、猛練習の最中、アキレス腱を切ってから、選手としての

出場を断念して、その代り、自分の一生を、コーチャーの職務に献げる決意を堅めた男だ。

空港前で、タキシードを申込んでいると、

「先生——田橋先生」

と声をかける女がいる。振りむくと、津山柳子だった。

「お迎えに行ったら、叱られると知りながら、来ちゃったんです。いけなかったでしようか」

柳子はレモン・イエローのハイネックのブラウスに、白のストラックスを穿いている。

「いけないさ……でも、乗りなさい」

タキシードを待つ行列は十五、六人もつづいていて、そこでいつまでも立話をしていることは許されなかった。柳子は待てしばしなく、タキシードのドアの中へ吸いこまれた。

ギアを入れて、車が走り出してから、田橋は気が重そうに黙りこんでいる。柳子はとりつく島がなかった。

「先生——ごめんなさい」

「生徒が空港や駅へ、送り迎えしてはいけないって、あなたに云ってあるじゃないか。物見遊山の旅ではないのだ」

「はい」

「それとも、僕に一刻も早く、知らせなければならぬ

ような事件でも起ったのか」

「須藤さんが、おやめになったんです」

「須藤が？ どうして」

「結婚なさるんだそうです。それで一昨日、急に退部届を出して……」

「僕が立つ日は、盛んに練習していたのになア……けぶりにも見えなかった」

須藤まみ子は、四年生で、平均台や跳馬では、八点台まで行っていた。然し時々、練習を休みがちなので、田橋はひそかに警戒していた。

「それは惜しいなア」

「でも、そんなことは、明日先生が学校へお出になってからでも、自然にわかることですわね」

「そりゃアそうだ」

「ほかには異状ありません」

「よし」

田橋は機嫌を直していた。

「僕はまた津山が、やめる決心でもして来たかと思っ
た」

「まさか」

「絶対大丈夫だろうね」

「絶対」

柳子は力をこめて答える。

「それで、ブダベストの大会はどうでしたの……先生」
「日本チームは、今一息というところだ。女子はやはりソ連が強い」

「ブダベストって、どんな街ですか」

「街なんか見ないよ。ホテルとスタジアムの間を何回となく往復しただけだ。観光とスポーツは別のものじゃないか。東京オリンピックを見にくるついでに、みんな日本を観光すると思ったら、大きに期待外れだぜ」

「先生らしいわ」

「僕はね、体操さえ見りゃアいいんだ。それが見たさに、わざわざ、行くんだ。ほかのことには関係ない」

それなのに、空港まで迎えに来た柳子は、やはりうしろめたい気がする。つまりそれだけ、田橋にとっては、不必要な雑音なのだろう。

車は京浜国道へ出た。

相変らずの混雑である。ゴー・ストップのたびに、長い退屈な停止を命じられる。

「この騒ぎは、ブダベストにはなかったな」
と、田橋は云った。

2

品川で田橋と別れた柳子は、S大に近い自分の下宿へ帰ってくると、留守に来て、柳子の部屋に上りこんでい

るのは、同じ部の宇賀伸子だった。遠慮もなく柳子の椅子を占領し、書架から、全集本の一冊をぬき出して、読んでゐる。

「お帰り。どこへ行つてたの」

「うん、ちょっと」

柳子はとっさの返事に詰った。

「怪しいぞ」

「何がよ」

「田橋先生を空港へ迎えに行ったんじゃないの」

「とんでもない」

と、否定する。

「だって丁度、時間がそうだもの」

「先生はどこへいらっしゃるンでも、送り迎えはご法度になつてゐるの……伸子、知つてゐるくせに」

「そりや表向きは、ご法度でもさ」

「そんなら、伸子はそこへ行けばいいのに……そうでしょう」

「よっぽど、羽田まで行こうかと思つたのよ。でも、お

目玉じゃいやだものね」

「先生って、こわいわ」

「へえ、柳子でもこわいの、いつも平ッチャラみたいな顔をしてるじゃないの」

「平チャラどころか」

「君、好きなんですよ」

「そりや、きらいじゃないわ」

「とげなさんな」

「伸子はどうなの」

「大好きよ。大好きだから、こわいのね」

柳子も首肯せざるを得ぬ。然し、ふしぎなことは、いくら好きでも、普通の恋人のように、伸子と競り合う心はない。一人の男のコーチャーを、みんなで共有して、憧れる。競争意識はそれより、体操競技の採点にある。平均台では負けても跳馬では勝とうとする。柳子と伸子は、入部以来のライバルだった。

「田橋先生は、チャスラフスカの写真、撮つて来たかしら」

伸子にそう云われて、柳子はうっかり、さつきタキシードの中で見た田橋のポートフォリオに、チェコのチャスラフスカはむろん、ソ連のラチニナやアスタホワの美しい写真が、何枚もはいつていたわと云いかけそうになつて、辛うじて云い直した。

「撮つていらっしゃつたにきまつてるわ」

「早く見たいな」

「明日、きつと見せて下さるわ」

「ほんと」

——そこへ近所のそば屋から、注文した天井が届いた

ので、二人はチャブ台を囲んだ。

食べ出してから、伸子が云った。

「こんど、那須へ行ってみたい」

「突然で、何んのことか、わからないけれど」

「栃木県的那須野よ、知ってるでしょう。そこに、うちの叔母さまの牧場があるの、千登世牧場って云うのよ。半哩の追馬場があって、とても素敵よ。その叔母さまは美しい寡婦^{寡婦}なの。でも未亡人のいやらしさがなくて、垢ぬけ^{ヌケ}していて、着物が似合って、いつもスケッチブックに、馬の絵のデッサンをしているような人……こんど大会明けの休日に、一緒に行こうと思って……賛成して」

「いいわ。そんな素敵な牧場なら、是非見たいもの。何んて仰有るの」

「広井みき子って云うの。女の牧場主なんて、珍しいでしょう。乳牛もいるから、牛乳は搾り立てだし、卵は食べ放題だし……第一サラブレッドの仔馬って、実に愛すべきよ」

「聞いているだけでも、ワクワクするわ」

柳子は高校時代に、一度行ったことのある那須岳のロマンチックな白い噴煙を思いうかべた。

3

田橋の家は、麻布四ノ橋の近くにある。通りに面し

て、兄の経営する田橋医院があつて、その背ろの別棟の二階建が、彼の住居になっている。女房は数年前に死んで居ないが、男の子が一人いる。寿男と云う。まだ、小学校の三年生だ。

寿男のために、栗葉^{くりは}さんという三十すぎの家政婦がいて、旅行の多い田橋の留守をまもってくれる。

然し、ろくに予定も知らさずに、ヨーロッパやアメリカへ旅立つかと思うと、帰るといふ電報もなしに、急に帰ってくるので、面くらうことが多い。

今日も、そんな予感^{予感}はしたが、何んの知らせもないので、油断しているところへ、医院の門からすぐ左へ折れる、せまい砂利道を、ザクザク靴の音を立てて帰ってきたのが、田橋だった。栗葉さんはびっくりしたが、同時に、嬉しかった。三十代のくせに、小娘のように、当分動悸が静まらなかった。

「お帰りなさいまし」

「寿男は」

「お元気ですよ。もうすぐ帰っていらっしゃいますよ」

「ほかに変りは」

「別に——書簡はみんな二階の抽斗に」

「例によって、お土産は何もないが——」

そう云って、すぐ二階へあがる。毎度のことだが、栗

葉さんにすれば、全く愛想がなさすぎると思う。

抽斗の中の沢山の封筒や葉書の中にまじって、須藤まみ子の退部届があるのを、田橋はイの一番に封切った。が、それは型通りで、退部の理由も一身上の都合とあるのみだった。田橋は須藤にかなり期待を懸けていたの
で、彼女を失う代りに、柳子なり伸子なりが、その穴を埋めてくれればいいが、それにはまだまだ、努力しても
らわねばならぬ——。

柳子は可愛い。

今日も禁を犯して、空港へ迎えに来た。これは、懲罰
ものだが、その心根はいじらしいほどだ。品川で、タキ
シーからおろすときも、腹の中は、おろしたくなかつ
た。丁度空腹だったので、銀座まで走らせて、久しぶり
に日本の食事がしたかった位だ。然しそんなことをした
ら、コーチヤーと選手の関係が汚くなり、まだ若い柳子
の前途を、あやまらすことになるかも知れない。それで
柳子とは、手も握らずに別れたが、街角に立って、タキ
シーのバックが見えなくなるまで、そこに立ちつくして
いる柳子の心に、田橋はせつない感傷を抑えきれなかつ
た。口では、送り迎えなど不要のことと強く主張するも
の、タキシー乗場で、柳子に逢った瞬間は、やはり嬉
しさに、心が躍ったのである。

——電話のベルが鳴った。誰だろう。伸子かも知れぬ

と思った。

「田橋さんですか。あたし……わかる」

そういう声は、伸子でも柳子でもない。

「私だけでは、わからないな」

「薄情ね……つい、今しがた、お別れしたばかりじゃな
いの」

「今しがた？」

「そうよ……タラップを降りたところで、あたしが写真
班に取巻かれている隙に、田橋さんは、ドンドン行って
おしまいになったでしょう……雲を霞とお逃げになって
も、この通り捕えたわよ——名刺を戴いてあったから」
「やっとわかりました。こんなに早く、電話を戴くなん
て、夢にも思わなかったものですから」

「明日お目にかかりたいわ」

「明日は一日中、練習を見てやるので——とても、とて
も」

「飛行機の中へ、あなたお忘れものなすったのよ」

その電話の最中、栗葉さんが、冷たいジュースを運ん
できた。

「忘れもの？ 何んでしょう」

「まだ気がつかないの。フィルムのカースよ。現像しな
いのが、三本ほど入っていますよ」

「そうでしたか」

機中で、ボートフォリオをあげたりしめたりするうちに、シートの隅におき忘れたのだろう。その中には、女子の男子のもの、各種目の微妙な一瞬をとらえた貴重な記録が沢山ある……。

「すみません。小包にして送って下さい」

「虫がいいのね。拾って上げただけでも恩の字なのに」

「では、どこへでも取りに行きます」

「明日の練習が終わったら、名刺の所へ取りにいらっしゃいな」

そこは霞町マンションとある。ベイルートから乗って来て、田橋の横のシートに坐った女だ。マスコミ関係の仕事をしていることだけが、大体察しられた。機上の退屈まぎれに、つい名刺の交換をしたのである……。

4

S大体育館は、地下室がフェンシング、一階が相撲部の土俵。二階が水泳部の室内プール。そして三階が体操部の練習場である。

南北の窓はあけ放たれ、若葉の風が匂っている。

入口に近いところに、床運動のマット。それから吊輪、鞍馬、跳馬、鉄棒、平行棒とつづき、女子のための平均台、段違い平行棒は、少し離れた窓際にある。その手前があるのが、トランポリンと称するバネの台だ。

そこで男子と女子が、入りまじって、猛練習がつづく。

今日はブダベストから帰ったばかりの田橋もいれば、先輩の松下たち選手権保持者の顔も見えるので、練習場内はいやが上にも、活気に漲っているようである。

伸子は平均台で、V字バランスの練習をくり返し、柳子は段違い平行棒で、高いバーから低いバーへの振りおろしの猛訓練をやっている。

練習中は、全く雑念がない。誰のことも考えない。何か別のことを思ったり、気が散ったりしていれば、必ず減点ものだ。

田橋の目が、どこかで光っている。

それだけは念頭にある。

バーを握る、柳子の視線は虚空を望んでいる。何回となく、くり返す運動のうち、低いバーで、下腹部のへんを撃つことがある。それが痛いときは、どこかにミスがあったからだ。ダイヴィングの選手が、高いところからダイヴして、水で胸を打てば痛いのと似ている。

五時。

練習が終った。

男子は男子更衣室へ。女子は女子更衣室へ飛びこんで行く。

然しシャワーは三つしかない。上級生から列をつくら

ねばならぬ。

みんな気が短いと見えて、順番を待つうちに、練習着はぬぎすててしまう。黒のタイツもとって、なめらかな魚のような足がむき出しになる。

柳子は三年生だから、七人目である。

一年生のときは、このシャワー浴びがひどく羞かしかったが、段々に狎れた。それでもあんまり平気ではいられない。

といって、男の子がいるわけではなし、女ばかりのシャワー室だから、何んともないと割切っている女子もある。でも、いくら男の子がいなくても、齡頃の娘同士だし、女の全裸を、女にも見せたくないのが、柳子の含羞……。

然し、上級生が、全裸でシャワーにかかっているのに、下級生が羞かしがって、腰にタオルを巻くわけにもいかない。

漸々と順番がきたので、柳子はみんなぬぎ棄て、一番奥のシャワーの下へ走った。

八人目は伸子である。彼女も同じく、まるッ裸になり、柳子につづいて、真ん中のシャワーへかかったが、

「あら、柳子ったら……」

「え？」

「見なさいよ」

伸子に指さされた自分のおヘソの辺に目をやった瞬間、水しぶきの流れる中に、ありありと、横ざまに赤黒い内出血の痕が見える。

「痛いと思ったら、ほんとだわ」

「恋人がいたら、怒られるな」

「お生憎さま——伸子じゃあるまいし」

「そう云えば、二三度ぶつけてたわよ」

それを云われると、柳子も弱かった。振りおろしを田橋に見られているという自意識が、このミスになったのかも知れぬ。

——更衣室を出ると、いつもいる事務室に田橋の姿がなかった。柳子は失望した。何を急いで、帰ってしまったのだろう……。

白日夢

1

霞町マンションの三階、南向きのコーナーが結城うづぼの部屋である。クリーム色のフラッシュのドアには、鍵がかかっていた。田橋はノックする。

把手が一回転して、ドアは内側に引かれた。目の高さ

にほんの小さなアクリライトの枠があつて、外の訪問客の容貌は、すぐわかるようになってゐる。

「いらっしやい。約束を違えずに、よくお出でになりましたね」

「忘れ物を知らせて戴いてありがとうございます。ここでお渡し下さい」

「そんなこと云わずに、お入りなさい。——散らかしていますけれど」

「でも、御婦人の部屋へは失礼ですから」

「お堅いのね。誰も居りませんよ。いつもは、パートでお掃除にくる若い子がいますけれど、さっき帰ったところなの。せっかくいらっしやったのに、お茶ぐらい、差上げなくては……」

うつぼは、そのドアをあけっ放しにしたまま、カーテンの奥へ引っこんでしまった。尚も臀ごむのを、奥から、

「どうぞ、田橋さん」

と呼ぶ。早速支度にかかるらしく、瀬戸物の触れあう音がした。これでも入らないと云えば、忘れものを渡してくれないだろう。田橋は勇気を出して、入口をまたいだ。そこでスリッパを履く。

部屋は和室の設計を取り入れた洋間だった。

杉柂の天井や五十八好みの棧の少い障子があるかと思

えば、高価な絨毯が敷いてあつた。田橋は四方を見回して、

「すてきな部屋だなア」

「わたしはもう、飽き飽きしちゃって……一ト月ぶりで帰ってきたのに、新鮮な感覚がまるでないんだもの」

「そりゃア贅沢を云えば、限りがないでしょうが……」

「コーポラスなんて、せいぜい半年住めば、鼻につくわ。ヨーロッパへ行っている間も、三日に一度は、パートさんにお掃除をさせてはおくんだけれど——」

うつぼはホーム・バーとまではいかないが、何本も並んでいるウイスキーやブランデーの瓶の一つを洋酒棚から取って、オン・ザ・ロックをつくった。

「昨日の飛行機、大分揺れましたね」

「そうですか」

「あら……あの位は平気なのね……吊輪や鞍馬で鍛えてあるから……」

「いくら吊輪をやっても、墜落となれば処置なしです」

田橋は冗談で応酬した。

「あの位揺れると、いつもは青くなるンだけれど、おかげさまで、あなたとのお話にまぎれて知らぬ間に羽田へ着いちゃいましたわ」

「時々、あちらへいらっしやるンですか」

「一年に一度か二度。日本にいと息苦しくなるでしょう。パリにもローマにも、友達がいますから、気軽に飛んで行けるんです」

「それは羨しいですね」

「でも、あなたこそ、お気軽じゃないの。オートフォーリー一つで……」

「ご商売は何をしていらっしゃるんですか」

田橋はそんなことまで立入って聞くつもりは全然なかったのだが、言葉のやりとりはすみで、結城うつぽの生活の裏付けを訊かずにはいられなかった。

「ホホホ……では多少、わたしという女に、興味をお持ちになった証拠ね」

「マスコミ関係でしょうか」

「それもありません。でも一つや二つではないの……昔から好奇心を炎やすほうでしたから。ただ、密輸はして居ませんから、お疑いあそばしませんように」

「そんな失礼な推測はしませんか……」

「でも、あなたの眼は、さつきから得態の知れない女として、睨んでいらっしゃるわ」

「それより、忘れ物を渡して下さい。それを戴かないと、何かおちつかない」

「ごめんなさい。肝腎のことを後回しにして……実はね、三本とも現像しちゃったんですよ」

田橋には、ショックだった。どうしてこの人は、そんな干渉がましいことがしたいのだろう。

2

三本のフィルムの中には、田橋のブライバシーは一枚もない。みな、体操競技に関するものだけだ。だから、それを第三者に現像されても、うしろめたいことはない。が、若し一枚でも、私用のものがあつたら、どういうことになるか。このフィルムは三本とも、田橋の自費で買ったものだから、その中に私用の写真があつたとしても、過ちではない。

「田橋さん、怒ったの」

「……いや」

「怒った顔よ……でも、あなたが怒るような写真は一枚もなかったわ……その意味では、期待外れだったの」

「……人のフィルムを現像するなんて、あまりいい趣味ではありませんな」

「ホホホ。たしかに——でも、飛行機の中へ置き忘れた以上、わたしがそれをガメて、興味的に現像したって、あなたは文句を云う筋はないのよ。わたしが電話をかけたのは、わたしの勝手でしょう。このフィルムに手をつけずに返せと仰有っても、あなたの一人合点だわ」

「なるほど、そういう論理も存在するのかな……置きわ

すれた以上、私有権の抛棄という」

「ほんとうは、あなたの愛人はどんな女だろうって、それに執着したのよ。ごめんなさい。謝るわ……宥^{なだ}めて」
ややこしい理屈を云うかと思うと、すぐまた甘えて、謝った。

——写真は一現像しただけでなく、焼付もしてあった。

すらりと細身のオーストラリアの女子選手ケージや、乳房の美しいスウェーデンのリンドルの平均台は、引伸しまでしてある。

「これは驚いた」

「ご機嫌直ったでしょう」

「まあね」

「これは一枚わたしが戴こうと思って、二枚焼いたのよ……」

「ユーゴのチェラルルの鞍馬です」

「すばらしいわ」

思わず田橋はうつばに寄添って、チェラルルの美事な両脚旋回に見入るうち、うつばの頬のおくれ毛が、自分の耳をくすぐるように、なぶっているのを感じて、いそいで身を退いた。

「もう一つ、驚かして上げることがあるわよ——云いましょうか」

うつばは、悪戯者らしい微笑を見せた。

「あなたは絶対に、送り迎えなんかしてもらわないんだって、飛行機の中で仰有ったわね」

「……………」

「ところがさ、とても可愛らしい、白のスラックスのお嬢さんが、ちゃんと空港まで来ていて、二人でタキシードに乗ってったわね」

田橋は全く図星をさされて、どうにも嘘はつけなかった。

「どこで見ていたの」

「どこであれ、この二つの目で、はっきり見たの……あの、恋人？ それとも選手？」

「体操部の部員です」

「では禁を犯したのね」

「うんと、叱っておいだ」

「もてるわね……いくら叱られても、少しでも早く逢いたい……純情じゃない」

「コーチャーと部員の間でそういう感情は禁物なんだ……あなたは冷かし半分に云うけれど……迷惑千万だ」

「また怒らしちゃったわね……あなたって、類のない怒りん坊よ。選手にも怒ってばかりいるんでしょう。それで、可^お恐^{おそ}もしてるんだらうけれど——ああいう純情な娘には、お誂^{おたづね}えむきの男性ね、あなたって人は」

うつばは、もっと怒らせたかった。カンカンに怒っ

て、灰皿をフロアーへ叩きつける位の所作を演じさせてみたかった。そこまで行けば、田橋はうつぼを、忘れ難くなるだろう。

3

「では、現像と焼付の代金を払いますから、お幾何でしょう」

田橋は立上って、ポケットから財布を出した。うつぼは、ジョニ・ウオーカーで、オン・ザ・ロックのお代りをつくっていたが、

「とんでもない。私が勝手に現像したんですもの」

「いや、それは困る」

「それより、これからお食事つき合って頂戴な……ピフステーキのおいしいのを食べましょう」

そう云って、グラスを持ってきたうつぼは、立っている田橋の目の前へ、自分の顔を近付けた。

（さア……この唇が欲しいんじゃないの。欲しければ、あげるわ。吸って頂戴）

と云わぬばかりだ。それでも思いなしか、グラスがこまかく顫えている。

おいしいピフステーキと云われて、田橋は腹の虫が鳴くような気がした。ヨーロッパでは、日本へ帰ったら、先ず血の垂れるようなヒステーキが食べたいと思つて

いたが、まだ食べていなかった。

しかし、これ以上、うつぼと行動を共にすることは、どういふ結果を生じるだろうか。

うつぼは田橋の心を見抜くように、

「ホホホ。食べたいンでしよう、ピフステーキ」

「それも図星かな。然し、よしましよう」

「危機感？ そうでしよう。そうなんでしょう」

「この次にしましょう」

「あら……では、これからもつきあって下さるおつもり」

「別にそこまではまだ考えていないんだが——きびしいなア」

「とにかく、もう一度、腰かけて頂戴」

いつのまにか、オン・ザ・ロックのグラスは、うつぼから、田橋の手に渡っていた。

「昨日はじめてお目にかかったんだけど、忘れられない印象を受けちゃったの……それに前から、体操には関心があったの。こんどの東京オリンピックでも、何んとか見られそうなのは、女子バレーと体操ぐらいなものでしょう……ほんとにブダベストへも行きたかったの……だから、あなたに指導してもらって、体操に関する予備知識をつくっておきたいの……いけない」

「いけないという道理はない」

それを結口に、また話が体操になると、田橋もつい、長ッ尻になった。ジョニ・ウオーカーも、二杯三杯と、重ねられた。

その話の中で、彼女は随筆を書き、シャンソンの歌詞をつくり、その歌詞の節付もすることや家具や調度の設計、キノノや帯のデザイン——そしてテレビのタレントでもあることがほめかされたものの、結城うつぼの正体は、尚いくつかの謎をのこした。

彼女には死んだ父の遺産があった。それを利回りのいい有価証券にして、兄の貢二にあずけてある。その配当が、月々兄から届けられるので、生活の心配はない。随筆の原稿料も、シャンソンの作曲代も、キノノや帯のデザイン料も、みんなうつぼの余禄である。が、それらの細部については、彼女は何んにも云わなかった。

「どうやら酔っぱらったようだ」

田橋は云った。

「ほんと？ 目の下がボウと染まって、すてきよ」

「ぼく、帰ります」

「ダンスなさるんでしょ。食事のあと、ナイトクラブへ行きましょう」

「それこそ、危機感だ」

「云うわねえ……でも、私……それ以上は、男性を誘惑したことはないのよ。はっきり申上げますが、娼婦じゃ

ないのよ。たった一度でも、娼婦の真似はしたこともないの。誤解しないでね」

「僕も……実は娼婦を買ったことは、一度もない」

「まア……男性には稀有のことね」

「娼婦の真似はしないというあなたの一言は気に入った。では、フィルムの現像代は、借りておきましょう」

「ほんとに、これからもつき合って下さるわね」

「然し、シャンソンもデザインもわからないから、体操に関するだけ……そして、危機感なんかないに……安心して、つき合えるなら」

「嬉しいわ……」

再びうつぼの顔が近付いたが、田橋は踵を転回し、ドアのほうへ歩いた。

4

霞町マンションの階段を降りてくる田橋の足もとは、大分おぼつかなかった。が、通りへ出ると、折からの爽かな薫風が、微醺をくるんだ。えも云われぬ快さだった。

だが、このままでは帰れない。田橋医院のある麻布四ノ橋とは反対に、青山墓地の坂をのぼって行った。風の中を歩くことで、酔いをさますほかはない。

この墓地の中には、死んだ妻が葬ってあった。